

岩手県岩泉町社会福祉協議会 野吾和子氏講演のまとめ

1. 自己紹介

テレビ番組で大石田町を知り、女性団体の仲間と一昨年大石田町を訪れた。お蕎麦に団子に、産直と、食と女性の活躍に大石田の旅を満喫した。山形県には特別の思い出がある。

さて、今年の豪雨災害から一年が経過したが、その一年の重さを感じている。

「大きく被災されたある方は、1年が過ぎたっていうけれど、この地域はまだ1年過ぎていないんだよ、あの頃めちゃくちゃで、分け解らない数か月があり、時間が止まっていたんだから…と話されました。そして、今地域では、河川工事やそれに伴う移転への不安の声が多くあります。

ある方は、『あの頃より、今の方が苦しいよ…』と、家屋撤去に伴い変わりゆく町の姿にさみしさや不安を新たに抱えている方もおられます。」

復興元年と言われ、様々なことが進もうとしている一方、はた目には分からない、それぞれの思いがある。ただ、あの頃のように、誰もが途方に暮れる日々ではないことが救いだ。

2. 豪雨により自らも被災しそうになった体験

職場からの帰宅途中、経験したことの無い激しい雨、道路に散らばる土砂や瓦礫、増水し襲ってきそうな濁流の川に恐怖を感じ、途中のスーパーの駐車場に車を止めた。電話をしている数分の間に、スーパーの壁の水位がどんどん上がってきていた。恐怖に竦んでみると、トラックの運転手が安全な場所へと誘導してくれた。自宅へはもどれないことを実感した。

濁流の川を見れば小屋や車、家具、布団などが流れていた。高台にある線路の上をみんなで励まし合いながら避難所の小学校まで歩いた。途中、濁流に流された高齢者の救出劇に遭遇した。

3. 想像を絶する大規模災害の実態

避難所で一夜を明かし、情報が無く被害の全体像は一切わからない。あとでわかったことだが、岩泉町は6地区に分けられるが、その6地区すべてが甚大な被害を受けていた。道路の多くが寸断され、孤立集落が各地に点在し、機能できる地域が残っていないのは大打撃だった。

入ってくる情報は必要な情報よりも、災害対応を批判する情報の方が多く入ってきた。「批判は必要なことだけど、後にしてほしい。今、町長、行政や関係者を潰さないでほし

い。誰も必死にやっている。今は一刻も早くこの状況から抜け出したいのに、…マイク向けるよりも水の一本でも持ってきてほしかった。」こんな声が聞こえてきた。

4. 自分の職場、ボランティアセンターの立ち上げ

避難所から自分の自宅に帰るには片側が崩落した国道を通らなければならず、もしこの濁流にのみこまれたら…家族のことが頭をよぎり、震えながら車をすすめた。全面通行止めになる直前、孤立集落となった小川地区の自宅へ戻り、家族の安全を確認すると避難所となった小川支所へ向かった。

通常は、町中央部にあるデイサービスどんぐり苑と就労支援いずみの里の看護師をしており、ボランティアセンターの経験は殆どない。

ここからは、支援物資の運搬や避難所対応が主になってきた。避難所となった小川支所では支所職員、地域振興協議会、自治会長、保健師、駐在所、消防、などそれぞれが職業、役職にかかわらず自然に連携し、次々と生まれる課題を解決していった。そして、自主防災会、民生委員が自主的に状況把握に奔走した。

大きな課題として、自主的に動かざるを得ない状況では、全体の動きが見えない、情報共有が困難なことなどがあった。そこで岩泉警察署長の提案のもと朝の定例会として連携会議を持つこととなった。これにより、連携体制が構築され、ボランティアセンターへの理解と協力が、より強く得られた。

9月中旬、ボランティアセンターがやっと軌道に乗ってきた。この頃には岩手県社協を中心とする支援社協や経営協と地元職員の思いが一つになっていた。苦労の末、築き上げた小川サテライトの仲間の支えがあったからこそ、ボランティアセンターの運営と地域活動に専念することができた。

避難所となった小川支所では地元の自治会のお母さんたちが交代で炊き出しに来てくれた。そのお母さんたちは自らも被災し、自宅は悲惨な状況になっていたにもかかわらず避難所の炊き出しにきてくれていたのだった。食事の時間は、情報交換や交流の場となり、食の役割の大切さを改めて感じた。

全国から来てくれたボランティア、支援スタッフが着用するビブスは地域の方々からの信頼のシンボルとなった。

5. 心がけたこと

①住民の声を聴くこと

思いを知ることができた

思いを繋げる

不安や誤解が解けた

正確な情報が伝えられた

②心の変化に付き合うこと

時間と共に変化する気持ちに寄り添うことで、信頼関係ができた。

③あきらめないこと

気にかかるケースに対して適切な対応

アプローチしても拒否される方に定期的に声がけ

④地域を歩くこと

情報が拾えた

ニーズを拾えた

人と繋がった

信頼が生まれた

⑤現場に行くこと

適切な人数と適切な資材

現場の依頼者とボランティアの要望をリアルタイムで聞き解決したかった

意見の食い違う家族間の調整をしないと、せっかくのボランティア時間無駄

⑥受け止めること

苦情や指摘を受け止め、真剣に検討し解決の方向に向けた

相手の気のすむまで話を聞き、関係を再構築した

⑦元気であること

何でも言いやすい、聞きやすい、頼みやすい存在でいたかった

⑧待つこと

親切の押し売りにならないよう、その時が来るまで気持ちを離さず待った。

⑨地域を巻き込むこと

自治会長、民生委員、公民館、自主防災会、お寺、住民

⑩くじけないこと、くさらないこと

自分との戦い

⑪よく話し合うこと

応援社協とのミーティングやその都度の話し合いを頻回にした。

⑫ボラセン業務だけでなく地域の何でも屋になること

6. おじゃんこの会（復興へ）

これまで災害に関わらず、活動してきた。何かをしたいとき、個では難しいが仲間ならできると思った。

おじゃんこは「思ったこと・じゃんじゃん・こしゃく」する会のこと。「こしゃく」は方言で、おせっかいのことを言う。

女性団体の一員として復興への活動に取り組む。母子協、ホルモン隊にも所属。今年の秋田での豪雨災害では大仙市に赴き女4人で畳35畳分の床はがし作業をした。

7. ふるさと岩泉への思い（みんな岩泉に来てほしい）人が来てくれることで岩泉の魅力を発見することができる。そしておもてなしの思いが生まれる。

（最後に大切なこと）・・・これからの災害対策

防災についての地域力をつける。防災訓練、自助の大事さの教育。発災時は共助はなされない、それぞれが、自分の事でいっぱい、隣の事まで余裕がない。平常時のコミュニケーションとネットワーク。世代間の関わりが大事だと思う。

普段からの地域との関わり方が大事になっていくと思います。誰も一人では、生きてゆけないのです。3年前、訪問介護に居た時にそういったケースがたくさんあり、そのあたりから地域への関心が強くなった。

行政だけを頼ったり、待っていたりではなく、自ら動く、関わり合う⇒共同、協働

高齢者や障がい者(災害弱者)が安全に安心して避難生活できるシステム作り。(平常時の訓練)

今回どこにも受け入れてもらえず、困った人がいた、人数制限があった。

住民の防災意識の向上

・今回強く感じたには、普段の関わり、活動があったからこそ、いざという時動ける。

平常時にやっていないことは、非常時には役に立たないと言う事。

・そこで、これまでもそうしてきたように、地域との関わりを大事にしていこうと考えて過ごしている。このご縁は自分だけの縁ではないと思っている。ボラセンにいられたからこそこのご縁。そのご縁を絶やさず、この地域に繋げていく役目を私は頂いている

- ・ネットワークを繋げる
- ・日頃からの関係機関、地域との連携
- ・情報を伝える役目
- ・心配しあえる関わり
- ・防災訓練を多職種で、役割を確認し合う（八幡平の例）
- ・次世代への教訓
- ・自助⇒心がけ、訓練次第では、自分の身は守れるが、高齢者などの災害弱者は、援護が必要。要援護者のタイプ別にあらゆる想定から、対策検討。
- ・共助⇒緊急時に「共助」は出来ない。自助公助となる。共助が出来るようになったら何

が必要とされるか何できるか想定。

＊復興プラン

- ・ 自立への取り組み
- ・ 失った仕事を取り戻す
- ・ 高齢者問題への取り組み
- ・ 次世代が住める町作り福祉作り
- ・ 町内の通院や用足しへの移動手段
- ・ 情報を伝える役目
- ・ 関係機関の連携
- ・ 災害時だけでなく、地域の支援のニーズ調査必要

大事なのは、どの時期に、どの地域が、人が、何を、望んでいるかアンテナをたてる事、情報収集が必要。

例えば、地域では今後雪かきの不安の声がある。

支援の押しつけではいけない。支援の申し込みが来たら支援先を決めるのでは、受援力があるところへ集中する。

ニーズ調査していればマッチング出来る。記述式だけだと書いてもらえない可能性がある。選択肢を作り合わせて記述式であればマッチングに結べる。⇒相談支援員がその役割。

炊き出し支援などがくる時、地域の負担にならない為に町内からもボランティアが必要

最後に「普段からの関わり」「連携」の大切さをあらためて訴え、まとめとします。

(本原稿の文章責任者：大石田町社会福祉協議会 田中正信)